

# 私学版はこうなっている ～大学の特色を構造的に伝えるしくみ～

私学版を中心に、大学ポートレートの特徴を解説する。私立大学の多様性を表すそれぞれの特色、取り組みを、構造的に説得力あるかたちで紹介し、大学同士を比較する観点を提供するしくみがポイントだ。従来の媒体にはなかったこうしたしくみが、大学選びの観点を変える可能性を秘めている。

## 特色の発信と同時に 改革を促すしくみ

私学版公開前に編集部が行ったヒアリングによると、多くの大学がポートレートへの参加を新たな負担と捉えており、必ずしも積極的な姿勢ではなかった。「さしあたって必須項目のみを入力しておき、公開後の全体的な状況を見てから対応する」といった横並びの意識がめだち、「他大学に比べて掲載内容が多すぎれば、後日削除を検討する」といった声すら聞かれた。

現時点でシステムとしての完成度が高いとは言えなくても、各大学が、自学の魅力伝える主体的な努力と工夫を施し、質の高い情報が集まってこそ、このサイトに価値が生まれる。そこから、よりよいものに育てる機運も高まるはずだ。必要最低限の情報を掲載しただけでは、既に公開が義務付けられている情報を抜粋したにすぎず、大学にも利用者にもメリットをもたらさない。

大学ポートレートの狙いは、各大学に説明責任を果たさせ、教育の質の保証・向上を実現することにある。「説明責任」の対象はさまざまだが、中でも重要なステークホルダーとして想定

されているのは、大学進学を希望する高校生やその保護者、高校教員などだ。どのような教育によって、いかなる知識・能力を修得できるのかを示し、大学選びに役立ててもらいたいという意図がある。各大学の情報は、統一されたフォーマットで掲出されるため、同じ項目間での比較が可能。これにより、高校生の大学選びを支援しようというわけだ。

設置形態に応じた多様性を尊重するため、私学版と、今後公開予定の国公立版のサイトのフォーマットは異なるが、基本となる掲載情報は共通で、国公立共通のトップページから双方の情報を一括して検索できる予定だ。

それでも利用者にとっては、2つのフォーマットの混在は不可解で、混乱を招く可能性もあり、統一されることが望ましい。

各大学のポートレートへの参加は任意であり、あくまで自主的な取り組みという位置付けになっている。基本的な情報は公表が必須だが、任意公表の項目もある(図表1)。中途退学者数や留年者数、財務状況などは非公表となっている。しかし、任意となっている「特色」や「取り組み」の情報を充実させれば、教育の特色による大学選びを促すことができるだろう。

ポートレートは、定量的なデータよりも、各大学の独自性を説明できる自

【図表1】各種データの取り扱い

必須公表	任意公表
<ul style="list-style-type: none"> <li>建学の精神</li> <li>大学、学部等の目的</li> <li>卒業生数等</li> <li>学生生徒等納付金</li> <li>定員数、入学・在籍者総数</li> <li>教員総数</li> <li>法人名、理事長名、法人所在地等</li> <li>設置学校、学部等一覧</li> <li>学校・学部等トピックス</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>特色、取り組み</li> <li>教員の職位・年齢別構成</li> <li>入学・在籍者数の男女別構成等</li> <li>各種人数表へのコメント</li> </ul>

※学校法人基礎調査の回答内容を基にした分類  
出典／「学校法人基礎調査と大学ポートレートについて」日本私立学校振興・共済事業団

由記述欄により多くのボリュームが割かれている。私学版の「特色」や「取り組み」の内容であれば、500字まで記述できる。より詳細な情報を伝えるために自学のウェブサイトをはじめとする外部ページへのリンクも可能で、ポートレート以外からの情報発信の充実も期待されている。

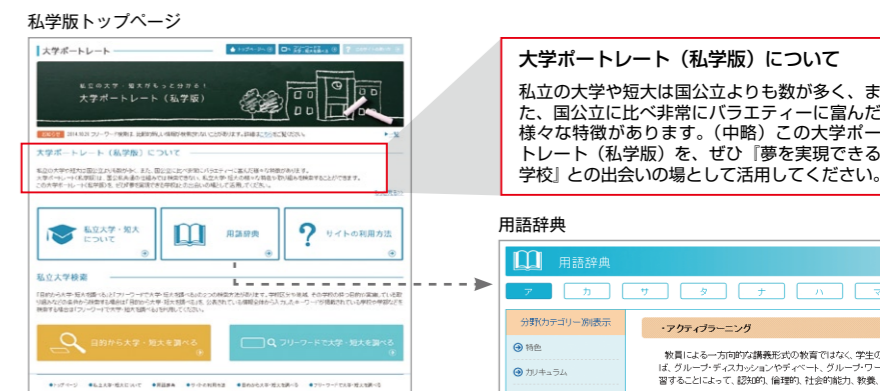
## 建学の精神を起点にして 特色を説明

私学版の運営を担う日本私立学校振興・共済事業団(以下、私学事業団)は、大学ポートレートを、社会、特に高校生、保護者、高校教員に各大学の強みを伝える「魅力発信の場」にすると表明している。

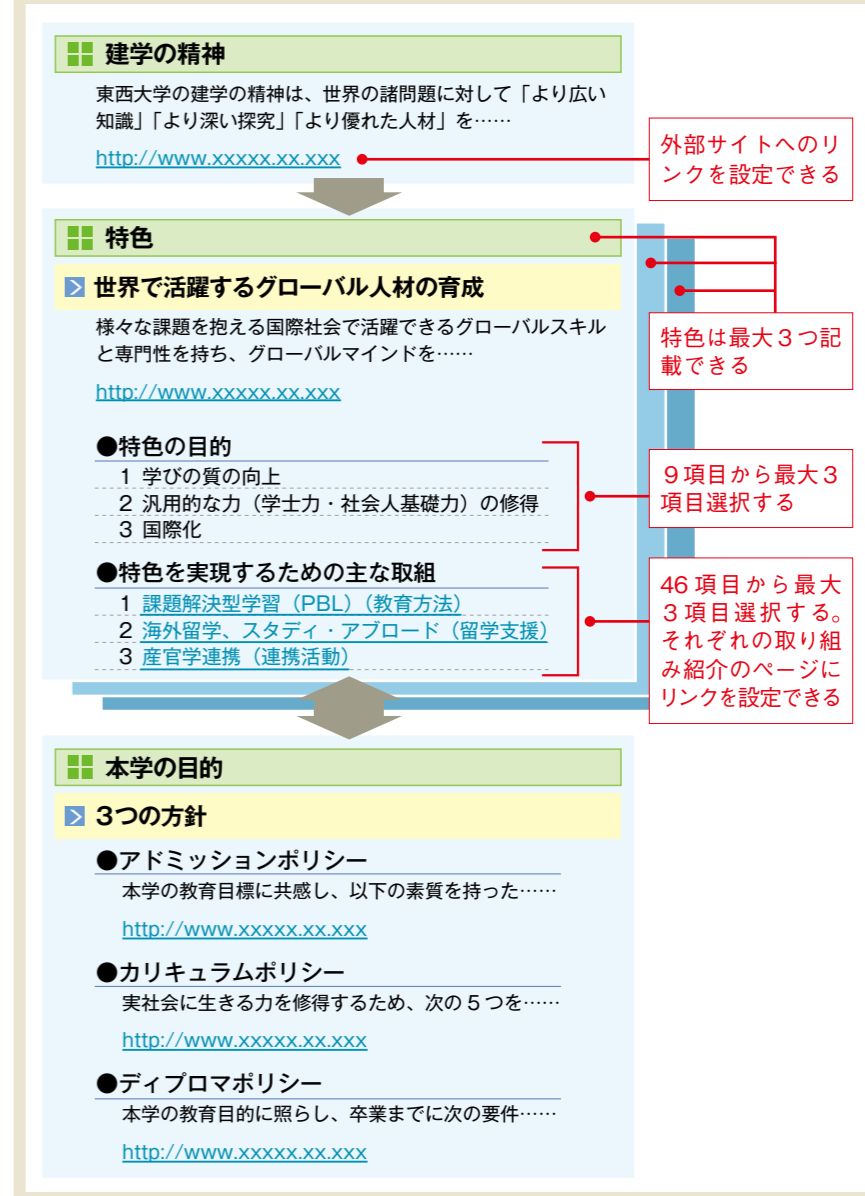
トップページでは、私立大学がそれぞれ建学の精神を持ち、国公立大学に比べて教育内容がバラエティーに富んでいることが強調されている。上部中央に配置された用語辞典では、大学教育に関する約60の用語を五十音別、分野別に検索できる。各大学・学部の記事を高校生や保護者にきちんと理解したうえで評価してもらおうという配慮がうかがえる。

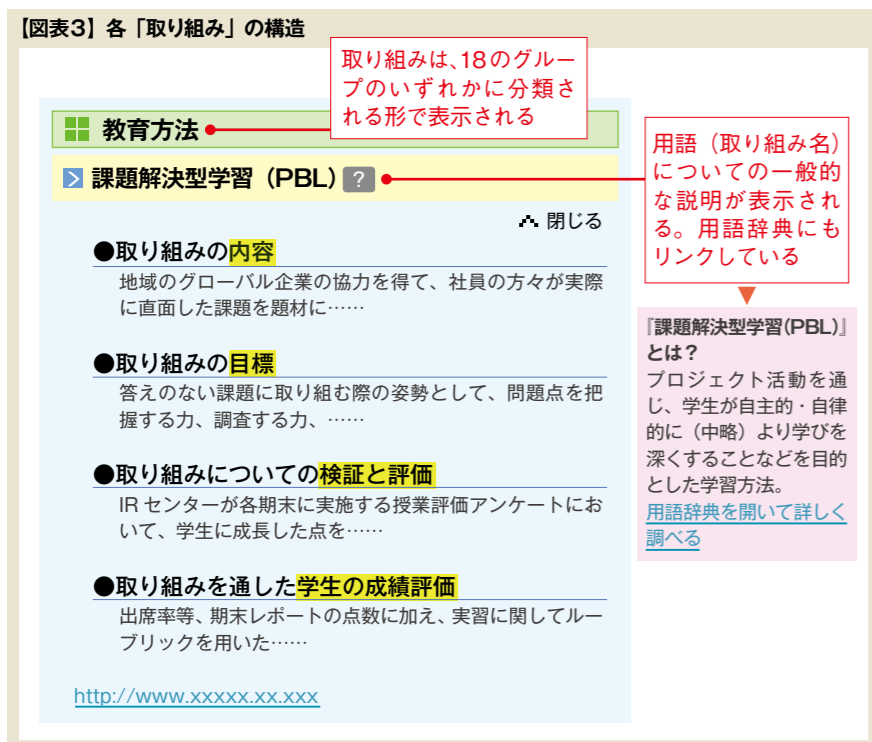
私学版の特徴が色濃く表れるのが、各大学の「本学の特色」ページだ。「建学の精神」「特色」「本学の目的(3つの方針)」の順に並んでいる(図表2)。私立大学にとってこれらには本来、一貫性があるはずだというポートレート設計者のメッセージと言えよう。大学が掲げる特色が、建学の精神や3つの方針(アドミッションポリシーなど)とどうつながっているのか、その具体性、構造を示すことができる。

特色の記載は3つまで。それぞれ、



【図表2】「本学の特色」の構造





タイトルと内容、「特色の目的」「特色を実現するための主な取り組み」で構成されている。目的は既定の9項目から、取り組みは46項目から、それぞれ最大3つを選ぶ。その特色が何をめざし、それをどのような手法で実現するのか。利用者は、ここからも大学が掲げる特色の具体性を読み取ることができる。

### 他大学との比較を促すグルーピングや検索機能

課題解決型学習(PBL)など、個別の「取り組み」においても、建学の精神、特色、3つの方針と整合性を持たせることによって、その取り組みが自学ならではどのような意味を持つかを伝えることができる。

「内容」のほかに、「目標」「検証と評価」「学生の成績評価」と、大学に

取り組みのPDCAを自覚させる項目立てになっている(図表3)。10月の公開時点では、目標以下の項目を入力している大学は多くないようだが、得られる知識や能力、またそれらが得られたことを保証するシステムが整っていることを明示すれば、その取り組みの実効性をアピールできる。高校生はそこまで読み取れないとしても、高校教員に対する訴求力はあるはずだ。

46の取り組みは、「本学での学び」「学生生活支援」など6種類の大分類、「カリキュラム」「教育方法」など18種類の中分類にグルーピングされている(図表4)。項目、グループごとに他大学と比較することにより、同じ取り組みでも大学によって内容が異なることがわかるしくみだ。

例えば、検索でA大学の「少人数教育」の取り組みにたどり着いたとき、中項目である「教育方法」内の「アク

ティブラーニング」「PBL」といった他の取り組みも一緒に表示される。したがって、A大学とB大学との間で「少人数教育」の中身を比べると同時に、B大学ではPBLやサービラーニングをやっているか、B大学だけにある取り組みは何かという視点でも比べることができる。

私学版トップページから各大学・学部ページにアクセスするには、目的別またはフリーワードによる検索を行う。

目的別検索は、学校名、都道府県などのほか、特色の目的、取り組みからも検索できる。同様の取り組みをしている大学同士の比較を促す機能と言える。

これは、大学自身も活用できる。他大学の同様の取り組みと自学のそれは何が異なるのか、わかるからだ。自学の課題を客観的に把握し、教育の質の保証・向上に生かすことも期待されている。建学の精神やカリキュラムポリシーをふまえて取り組み内容そのものを再検討することもあり得るだろうし、それをポートレートでわかりやすく伝える工夫も求められる。

これらの検索条件は複数を選択できるため、「『〇〇県』で『汎用的な力の修得』を目的とした特色を持ち、『地域連携』を行い、『ラーニングコモンズ』を備えた大学」といったかたちの絞り込みができる。難易度や規模ではなく、教育の内容を基準にした大学選びに導く機能と言えそうだ。

### ポートレートが変える大学選びの価値基準

高校現場におけるポートレートの認知度は、残念ながら高いとは言えない。

「1つの画面内で大学間の情報を直接比較する機能がない」といった利便性に対する疑問があったほか、そもそもポートレートの存在を知らない教員、生徒が多いのも実情だろう。

情報提供側、利用者側のどちらから見ても、ポートレートにはまだまだ改善の余地がある。私学事業団や文部科学省が「みんなで育てるシステム」と言うように、参加し、活用したうえで改善

を提案していかなければ、現状のままだろう。特に私学版は、大学が掲げる特色や取り組みについて、その一貫性や学生に与える効果の裏付けとして、わかりやすく説明できる構造にしようとの意図は確かに読み取れる。利用者がポートレートを読み解き、うまく活用すれば、入試難易度一辺倒の大学選びの基準を、「教育の方法が自分に合っているか」「卒業までにどんな力が身

に付くのか」といった新たな価値観に変える契機になるはずだ。

学内においても、建学の精神を起点として、特色や取り組みに一貫性があるか、他大学と比較して独自性があるかなどを顧みられた結果を、改革の推進力にできる。そのためには、トップがポートレートの有用性を理解し、組織的な対応を推進できるかどうかがかギになるだろう。

【図表4】46の取り組みのグルーピング（大分類と中分類）

